

## からし種一粒の信仰

諏訪熊太郎

私は百姓だから学問上の話は出来ない。ただ四十何年かの信仰生活を盡して生きて来た。長い生涯の中で、これは尊いということについておわけしたい。

今晩は私の知った正しき信仰について語りたいと思う。ルカ伝十七章五節十節迄を読んでみると、弟子たちとイエス様の信仰についての考え方が違っていることに気がつくと思う。イエス様は、からし種一粒ほどの信仰で差支えない、大きくても小さくてもよろしい、それが大きな働きをするのだと仰言る。弟子たちは、信仰とは、精神力とか、靈力とか、信念の如きものを指したのである。前から弟子たちは、何度も信仰がうすいとか、よわいとか叱られて来た。湖が荒れて船中で弟子たちがおそれた時、「なにゆえ臆するか信仰うすき者よ」と言われたし（マタイ伝八の二六）、パンを携えることを忘れた弟子たちが、そのことにこだわり語り合った時、「ああ、信仰うすき者よ、何ぞパンなきことを語りあうか」とも戒められた（マタイ伝一六の八）。

第一の事件は、今日で云えば戦争などの危機であり、第二のは、生活問題の危機とも云えるだろう。だから弟子たちは、どんな危機に直面してもびくともしない泰山のような信仰を望んだのであろう。それが「我らの信仰を増し給え」という希望となつたのである。それに対してイエス様は「もし芥

子種一粒ほどの信仰あらば、此の桑の樹に、抜けて海に植れ」と言ふとも汝らに従ふべし」と仰せられた。この言葉は弟子たちにイエス様が直接言われた言葉であるからこの中に眞の信仰が語られていなければならない。

私は一粒が大切だと思う。全人格でなければならぬ。半粒ではいけない。どれ程偉大でも半分では駄目だ。粒のまゝ、全人格を委ねることこそ眞の信仰である。三位一体の神学上の問題などどうでもよろしい。神が人間を救わんが為に手をのべられた。この手がキリストである。手であつてもこれは神である。手をのべておられる神にどうして委ねないか。片腕でもあほうでも、馬鹿でも何でもよろしい。天分なんか問題ではない。それは幼子のような信仰でなければならぬ。エス様がお話をしている時子供が傍に来たら弟子たちが外え押しやろうとした。するとイエス様は子供を邪魔にしてはいけない。天国はこのような者のものだと言われた。これは子供のすることなら何でもよいというわけではなからう。イエス様が言う幼子の特性は、母に対する信頼の態度であつたに違いない。幼子は全部を母親に投げかけて何が来ようと母の懐にありさえすればびくともしない。マタイ伝十六章でペテロが、「なんぢはキリスト、活ける神の子なり」と言つた時、イエス様は大変およろこびになられた。然し、イエス様を神の子というだけなら、ゲラセネで、悪霊につかれた者でもそう叫んだ。とすればこれは言葉だけの表現の問題ではない。ヨハネ伝六章でもそうである。「人の子の肉を食はず、その血を飲まずは、汝らに生命なし」と仰言られた言葉に多くの人がつまづき去り、再びイエス様と歩まなかつた時、「なんぢらも去らんとするか」と十二弟子に問われた。この時、シモ

ン・ペテロは答えて云った。「主よ、われら誰にゆかん、永遠の生命の言葉は汝にあり、又われらは信じ且知る、汝は神の聖者なり」と。ここにペテロの絶対的な信頼がはつきり示されている。

又ルカ伝十五章の放蕩息子のたとえでもそうである。我がまゝな次男坊は、出てゆく時は堂々と出ていったが、乞食よりも甚くなつて帰つて来た。しかし、出てゆく時は心が離れていた。即ち失せた人間である。ところが今は無条件でお父さんのもとに帰つて来た。それが失せたものを得たのである。

これこそ正しき信仰であると確信する。その結果はどうなるか、桑の木に移れと云えば海に移る。信ずるものにはなし得ないことはない。全能になるのである。

私はこれは誇張だと思つた。一昨年私はここにひつかかつた。しかしにらめっこをしているうちに、これがわかつた。イエス様が弟子たちを前にしてほらを吹くはずがない。これがそのまま本当だと確信した。何故か。私たちが救われたということは、桑の木の移るどころでない大きい事実である。我々は生れのままで罪と、とがによつて死にたるものである。そのくされ死んだ者に永遠の生命が与えられた。場所的に云えば地獄より天国に属するものとなつたのである。

しかしある人は言うだろう。「それは神のみ旨、み力によつて与えられたのだろう」と。そういう時、イエス様はいつも仰せられた。「汝の信仰が汝を救つたのだ」と。ルカ伝十一章十九節、同じくルカ伝十八章四二節をよく見て頂きたい。医したのはイエス様である。しかし盲も癩病もイエス様を信じたので医して頂けたのである。信頼しなければエス様

もなす術はない。エス様は名工である。どんな屑ガラスでも工場えゆけば立派な器になる。同様に全人格をエス様におまかせする時、エス様は私たちを救つて下さるのである。

又歴史上桑の木が海へ移つたことなどないという疑問もある。しかし私は思う。必要でないことは起らなかったのだと。ペテロ後書三章十節から十二節を見ると、来るべき日に必要とあらば、天地のすべてを燃え崩したもうであろうともある。このことは私一人が信じていることではない。信ずるクリスチャンすべてがそうだったのである。

さてルカ伝十七章にもどつて十節のところであるが、人間の主人と同様に、神様は随分無理だと思ふようなことをも為せと云われることがある。どんなことでもやらなければならぬ。そして命じられたことをみなしてしまつた時、「わたしたちはふつゝかな僕です。すべきことをしたに過ぎません」そう云えるものにならなければいけない。

再びはじめにもどると、弟子たちの考えるような信仰即ち靈力や信念に頼るものは神の前に自力を誇るようになるだろう。しかし、からし種一粒の信仰者は救われた事をただよろこび、誇りはすべて主によるのみである。

自分が駄目だということがわかればわかる程よろしい。キリストを知られば知る程よろしい。そして益々み業にあずかることのみをねがうようになるのである。

(水戸無教会誌第十三号より)

## 私の信仰

昭和三十七(一九六二年)七月二十八日

羽黒山聖書講習会にて話せるもの

諏訪熊太郎

ピリピ人への手紙第二章十二節〜十三節

私の愛する者達よ、そういう訳だから、あなた方がいつも従順であつた様に、私が一緒に居る時だけでなく、居ない今は一層従順で居て、恐れ慄いて自分の救いの達成に努めなさい。

あなた方の内に働きかけて、その願いを起させ、且つ実現に至らせるのは神であつて、それは神の善しとされる所だからである。

黒崎先生から、私もお話をする様にとのお言葉を、ずっと前から頂いて居りましたが、私としてはどうしても其の氣に成れなかつたので、固くお断りをして参つたのであります。最近になつて又々そのお勧めを頂いて見ますと、『どうも之れ以上の御辞退は宜しくない』との氣持ちが起つて参りましたので、ともかくお受けを致した次第でございます。

併し私には、元々学問の事は判りませぬから、然ういうお話は出来ませぬし、私に出来る事は唯だ一つ『自分の所信を陳べる』という事のみなのであります。で、それを陳べて見たと思います。題をつけるとすれば『私の信仰』であります。

私は元來、からだが弱く、今まで生きて居る者とも思われなかつた關係もありまして、信仰の重要問題に就ては疑問のある俣に放つて置く事は出来なかつた。で、拙速かも知れないが、自分なりには解決がついて居りますので其れの若干を陳べて見たいと思ひます。

(一)「救いの事」先ず第一に『自分は救われて居るかどうだろうか』という問題です。その点に就て私は『私は救われて居る』と確信して居る者であります。そして其の証拠は如何と問われるならば私は答えます。

私はイエス様を救主と信じて居る。そしてそのイエス様から救つて頂きたく、イエス様に信賴をして居る。之れが、私がイエス様から救われて居る事の何よりの証拠である。

と答える者であります。何故か、と言へば、イエス様は、御自身に信賴する人である限り、絶対に捨てる事はない、必ず救つて下さる御方に在すからであります。

で、只今現在、そういう風に救われて居る事は間違いないですが、では之れから将来は何うだろうかという事になれば、私は大丈夫と思つて居ります。何ぜかと言へば、私がイエス様を信じ始めてから今日に至るまで、約五十年の生涯であります。その間というもの、それは見様によつては『イエス様と私との結び 付きの堅くされる為めの訓練の生涯であつた』と言ふべきものであります。訓練でありますから、それは生まやましいものではなかつた。時には其のきびしさに、結びの綱も断ち切れやせぬかと危ぶまれる事もあつた様なのであります。併し結局の所は、何うやら斯うやら切り抜けて今日に至りました。そして然ういう風に、戦いを切り抜けて参りますと、其の度び毎にイエス様との結び付

きは愈々堅固なものにされるのであります。ですから今では其の結び付きは相当に堅固なものとされて居りますし、これから将来之れが断ち切られるという様な事はあり得ない。イエス様は必ず救いを全うして下さる事と堅く信じて居る様な次第であります。

では斯うして救いを頂いて、将来その救いが完成されまします場合に、私はどんな風にして頂けるだろうか？という事になれば、私は其処に思いの至ります度に毎に、実は心の躍る思いを禁ずる事が出来ないのであります。先ず何よりも嬉しく思います事は、心を清めて頂く事です。私は今の自分の心の有様を眺める時には、泥沼を眺める様な気がします。全然、天に適わしからぬ地獄向きの精神だと思つて居るのです。そこに気がついた時、昔は苦しみました。併し今ではそれが為めに心を痛めるという事はありませんのです。然ういう汚ない有り様を今更の如くに強く感じさせられる事が、今でも屢々あります。然ういう度び毎に私は、自分をば思いつ切り軽蔑します。『ざまあ見ろ！此の姿よ！』然るにこんな奴をすらイエス様は、立派な立派なイエス様と同様な、あの愛の心、あの清い心、あの氣高い心に完成して下さるのだ。何という感謝であろう。と、自分の姿の醜さを見れば見るほど、イエス様への感謝が湧き上がつて来るのであります。

而かもイエス様の救いの御業は尚も高く進められるのであります。然ういう清められた精神に適わしい所の身体が与えられる事になりますし、更に、それに適わしい所の住所も与えられる事になります。即ち今の此の身体は死んで腐敗しようとうと灰になろうとイエス様は御自身の復活体と同様の栄光の体を与えて復活さして下さる。『彼は万物を御自身に従わせ

得る力の働きのよつて、私達の卑しい体を、御自身の栄光の体と同じ形に変えて下さるであろう』（ピリピ三・二一）とあるが、全くその通りにして頂く事に相違はないのであります。そして、然ういう者達の住むに適わしい住み家即ちいわゆる「生ける神の都」「天のエルサレム」に住ませて下さる。そして其の処に於ける非常な栄光の御交りに入らしめ下さるに相違はないと信じて居るのであります。之れ、今の私の確信であります。

(二)「聖霊の事」次には聖霊の問題です。聖霊を受けたとか受けなにか、よく問題にされる様であります。其の聖霊、即ち神の御霊が、今、私に宿つて居られるであろうか、何うであろうか、と言え、其の事に就ては私は『私の中には聖霊宿つて居られる』と確信致して居る者であります。それは何によつて判るかと言え、私はイエス様をば救主と信じ、そのイエス様に信頼をして居る』此の一つの事実です。これが、聖霊私の内に宿つて居られる事の何よりの証拠であります。何となれば「聖霊によらなければ誰れも、イエスは主である」という事が出来ない（コリント第一、十二の三）と明記してもあるし、又パウロは、あの欠陥の多いコリントの信者達（声を大にして叱らなければならぬ様なあのコリントの信者達）に向つてさえも「あなた方は神の宮であつて、神の御霊が自分のうちに宿つて居ることを知らないのか。」（コリント第一、三の十六）苟もキリストを信ずるあなた方には神の宮であるが宿つて居なさるので、従つてあなた方は神の宮であるのですぞ、と呼びかけて居る様な次第なんでありましますから『イエス様を救主であると信じてそのイエス様に信頼する者に成つて居る』という其の事實は、これ、聖霊が我が内に在

すという事の何よりの証拠であると私は思つて居る者であります。　で、私には、奇跡を行う力もなければ、異言を語る事も無いのですが『私の内には貴き聖霊が宿つて居られ、私は聖なる神の宮たる者である』という事は少しも疑う所なく確信致して居るのであります。

(三)「生活の事」最後に、では我々信者たる者の日々の生活の仕方は何ういう風にすればよいか、という事ですが、其の点になりますと、私の今の行き方は極めて簡単であります。従つて極めて呑気というか安楽であります。

(A)【精神生活の行き方】元の私は、ひどく聖書の律法を気にかけました。聖書のある所に何と書いてあるから、あの様でなければならぬという風に気にかけてましたから、其の当時の生活態度は戦々競々たらざるを得ないものであります。然るに今の私は、然ういう風な行き方を致しては居りませんのです。では何ういう風にして居るかと言えば、唯だ胸に響く所の御霊の御声に従つて進んで行けば良いし、我が行き方は是非とも然うでなければならぬと思つて居るのであります。

では其の、胸に響く御霊の御声とは何ういうものを指すか?と言えば、それに就ては少しく説明をしなければならぬと思ひます。私は前に、聖霊私の内に宿つて居られる事を確信して居るといふ事を申しましたが、その聖霊の宿り方といふものは何ういふものかと言えば、それは例えて言うならば、私の胸の中にイエス様からの受話器が取り付けられた様なものだと思つて居ります。イエス様が聖霊を受けられた時は、天開けて其処から聖霊鳩の如くに下つて来るのをイエス様はご覧になられたとの事でありましたし、其の後、最初の弟子達に言われた所によりますと「よくよくあなた方に言つてお

く。天が開けて、神の御使達が人の子の上に、上り下りするのを、あなた方は見るであろう」と言われたのであります。

そういう点から考えましても、聖霊が我々に宿るのは、それは一箇の宝珠の玉が宿る様なものではなく、將に、神と我れとの間に塞がつて居るところの障壁が破られて、そこに連絡の道が開ける事であると私には解されるのです。それで私が前に申しました『聖霊宿つたと言ふ事は、私の胸の中にイエス様からの受話器　が取り付けられた様なものだと思つて居る』と申しましたのは、然ういう意味の事を申したのであります。

そして其の場合の放送者は勿論イエス様ですが、そのイエス様は、勿論今も生きて天に、神の大権の御座に座し、宇宙万有を支配して居なさるイエス様です。ですから私が頂いて居る所の聖霊は、私がイエス様に連なつて居る限り、力を以て働いて下さるのですが、若しも私がイエス様に後ろ向きになつて、イエス様から離れてしまつたならば、其の時即座に、受話器の働きは止んでしまつて、最早や何物でもなくなつてしまふ事勿論であるのであります。

兎もかくイエス様は、御霊によつて其の御声をば、我々に聞かせて下さいます。では其れを聞き受ける所の我々の耳は何であるかと言えば、前には『胸に響く』と申しましたが、もつときつぱりと言えば、『内なる良心』です。良心こそ、イエス様からの御声を聞き受ける『受者』となるのです。そして此の良心という受話者に響く神の御声なるものは、それは決して『稀れに』と言つた様なものではなくて、『常に』です。何時でも不断にです。

母は其の幼児に対して常に御声をかけて居ると言うたら間違ひでしょうか。私は然う言うてもよいと思います。言葉には出さない時でも、無言の声をかけて居ると言えると思うからです。恰も然ういう意味で、イエス様は、常に信者たる者に対しては御声をかけて下さって居なさるのであります。何もせずに休むべき時には無言の御声を、何かを為さねばならぬ事のある時には、義務感とか責任感とかを胸に(良心に)起して、然うしなければ相済まぬ様に働きかけて下さるのであります。

そして私の場合を言えば、その御声は、何時でも私に丁度よい程度に掛けて下さるのであります、其れは実に親切です。慈愛のお母さんが、三つ子には三つ子に適せる程度に、七つに成れば七つの子に適せる程度に、少しも無理なく又、甘やかしてもせず最も適当に御声をかけて下さる様に、イエス様も、私には私に最も適せる様に御声をかけて下さるのであります。それで私の仕事は、此の御声に従う事でありませぬ。唯だそれだけで良いのでありまして、何も余計な事をする必要もないのです。私は断然その様に思つて居る者であります。だからして今の私は、昔、律法相手に生活をした時とは全く異い、至極のんびりして居りますし、心平安であるのであります。

唯だ其の間に特に注意すべき大切な事は、御声を聞き逃がしたり、聞き違えをしたりせぬことです。其の為めには、受話者たる良心という耳に故障が起つたりせぬ様に心掛けなければなりません。それには何うしたら良いかと言えば、御声が掛つたら即座に従う事です。従い従い迅速に従えば、良心はいよいよ清められたる、いわゆる『善き良心』となるので

す。然るに若しも其れに従わず、踏み付け踏み付け不従順にして居りますと、遂にはテモテ前書に「良心に焼き印を押されて居る偽り者」(四の二)とある様な状態にならぬとも限らぬのですから、此の点は特に注意をせねばならぬ事と思つて居る次第です。

要するに、私の生活の仕方は、良心に響く御霊の御声に従順に従つて行く。之れで宜しいのであつて、之れが私の唯一の行き方でなければならぬと思つて居るのであります。従つて、私の行き方は、前から申して参りました通り、極めて簡単であり、且つ安楽であるのであります。

併し此の呑気安楽と申しましたのは、之は内側の精神生活の方面の事を申ししたのであります、外側の方の境遇的な方面の事を申しますならば、それは必ずしも呑気安楽といった風のものではなく、前にも申しました様に、其れは反つてきびしい訓練の連続と申うてもよいものだったのであります。

(B)【境遇に対する行き方】私は恥かしいですが、元来、弱虫でありますから、気の強い人には『これしきの事』と思われる様な事でも、私には随分痛く感ずるのであります。それで私の生涯というものは、それだけ余計に苦しみの多い生涯であつたのであります。では其の大きな苦しみに對して私は何ういう風に對しましたかと申しますと、初めのうちは、一時も早く然ういうものから解放される様に祈りました。病氣の時には病氣の早く癒される様に、又、嫌な事情が起つた時は、然ういうものが一時も早く解消する様に祈つたのであります。然るに今より十何年前の或る日の出来事以來というものは、私の苦難に對する態度は一変し、喜んで居ります

次第ですから、今から其の事を申し陳べて終りにしたいと思  
います。

それは、時日を正確に申せば昭和二十六年四月八日の事  
ですが、其の時私は病床にありましたが、そこに、心を痛める  
事が色々と重なり重なり起つて参つたのでありました。弱い  
私、もうやり切れない思ひになつたのでありました。寝ては  
居れない。起き上がつて見るが一層苦しい。全く何うにもや  
り切れない思ひになりました。その苦しい最中にです。私は思  
わずも斯う祈つたのであります。「神様、あなたの与え給  
うだけを頂戴致します」と祈つたのであります。声に出し  
たか何うかは忘れましたが、それはどちらであつても同じ  
事、兎もかく然う祈つた。そして然う祈りましてから私は反  
省をして見た。そして『おれは今、よ、い祈りをした。我が祈  
りは斯うでなければならぬだ』と強く感じたのでありまし  
た。祈りの意味を言えば、

私の心は、好きな事物はなるべく多く来る様に、嫌いな事物  
は成るべく来ない様に欲するので、神様からも然ういう風に与  
えて頂きたく、今迄は祈つて参つたのですが、併し今度は然  
うではなく、神様が善しとして御与え下さるものであれば、  
好きな事物嫌いな事物、どれほど多くあろうと、少くあろう  
と、文句言わずに従順に頂戴致します。

という意味なのであつて、之れでこそ神への本当の従順とい  
うもので、我が取るべき態度は斯うでなければならぬのだと、  
強く感じたのであります。

そこで今度は改めて此の事をば心をこめて御祈り申し上げ  
た。『今は、嫌に思ひます事がこんなに多くありますが、併  
しそれでも、之れが御意でございませうならば頂戴致します。あ

なたの与え給うだけを頂戴致します』という風に申し上げた  
んであります。所が、心の中は、今までの苦しみが一変致  
しまして、愉快の様な軽い気持ちになつたのであります。  
そして結局に於ては、実際の事情も、そんなに大した事もな  
く好転したのであります。それ以来というものは、嫌な  
事に会う度び毎に、今でも此の通りの祈りの言葉を繰り返し  
て居ります。『あなたの与え給うだけを頂戴致します』です。  
斯う祈れば殆んど凡ての場合、心は平安に治まる事を経験し  
つつ今日に至つて居るのであります。

結語　そして此の態度は、之を言いかえれば、神の与え  
給う境遇に対し、心から従順に従うという態度なのでありま  
して、従つて私の現在の信仰生活なるものは、

内なる心に於ては、その内なる良心の耳に掛けて下さる神の  
御声に従順に従わんとし、外なる境遇に於ては、これまた、  
神の御与え下さる所に従順に従わんとして居るのでありまし  
て、一言以て言えば、

『神への従順』

これこそ私の實際生活の行き方となつて居るのであります。

元より懦弱な人間の事ですから、それに背くような事も有  
り勝ちなのですが、兎もかく私の大方針としては其の様に  
なつて居るのであります。

そして私自身としては

私は本当に幸福な人間だ。

私の歩いて来た道は、

誤りではなかつた。

本当の生命の道であつた。

何とも有りがたい限りだ！

と、神への感謝一杯であります。  
以上が、私の信仰の背骨であります。

(終)

(水戸無教会誌第六十八号より)